

出口治明さん連続講義

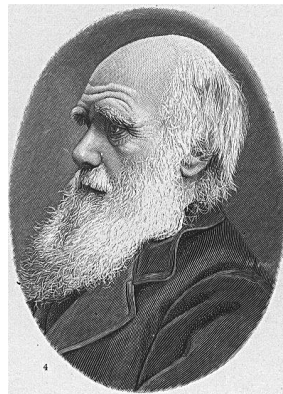
「古典を読めば、世界がわかる」

第1回 2018年10月9日



# 『種の起源』 ダーウィン／渡辺政隆訳

(光文社古典新訳文庫)



すべての生物は神が個別に創造したものだという「創造説」が主流の時代に、ダーウィンが発表したのは、生物は共通の祖先から分岐し、自然淘汰によって進化したとする『種の起源』だった。

ダーウィンはまず第1章で動植物を人為的に変異させる過程を解説した上で、第2章で、自然条件下での変異を紹介する。さらに第3章「生存闘争」、第4章「自然淘汰」へと発展させ、生物の進化について説明を続ける。

進化は、新たな形態や機能を獲得すると古いものは消失してしまうゆえ過程を明らかにできない場合もあること、必ずしも合理的な進化ばかりではないこと、化石などの証拠が不十分であるため、古い時代の進化の過程は明らかにできないことなども述べつつ、進化とは、個体が環境に適応することで起きたものであると繰り返し述べている。

## ダーウィン略年譜

- 1809年 イングランドの中西部にあるシュルーズベリにて裕福な中産階級の家産に生まれる。父は医師、母は製陶業ウェッジウッドの創始者の娘。
- 1825年 医学を学ぶためエジンバラ大学に入学。16歳
- 1827年 手術で患者の悶絶や血を見ることに耐えきれず、エジンバラ大学を退学。18歳
- 1828年 聖職者になるためケンブリッジ大学クライスツ・カレッジに入学。19歳
- 1831年 クライスツ・カレッジを卒業。22歳  
ビーグル号乗船の打診を受け、今の日本円で500万円ほどの支度金を父親に融通してもらい、熱帯へと向かう。
- 1833年 バイア（ブラジル）に上陸し、本物の熱帯林を初体験。23歳
- 1835年 ガラパゴス諸島に上陸。26歳
- 1836年 ビーグル号がイギリスに帰港。旅先から送った膨大な標本や観察日誌により、帰還時には学会の寵児に。27歳
- 1837年 種の転成に関するノートをつけ始める。28歳
- 1839年 『ビーグル号航海記』を出版。30歳
- 1842年 種に関する草稿を完成。33歳
- 1844年 種の進化に関する試論をまとめる。35歳
- 1856年 大著『自然淘汰説』の執筆を開始。47歳
- 1858年 ナチュラリストのアルフレッド・ラッセル・ウォレスから届いた論文草稿が刺激となり、『種の起源』の執筆を開始。49歳
- 1859年 『種の起源』を出版。50歳
- 1860年 『種の起源』第二版から第六版を出版（～1972年）。
- 1882年 33歳の頃から住んでいたロンドン南東にあるダウンにて死去。73歳

### <そのほかの著作>

- 『サンゴ礁の構造と分布』1842年
- 『ランの受精』1862年
- 『よじのぼり植物の運動と習性』1865年
- 『飼育動植物の変異』1868年
- 『人間の由来』1871年
- 『人間と動物の感情表現』1872年
- 『植物の他家受精と自家受精』1876年
- 『花の異形性』1877年
- 『植物の運動力』1880年
- 『ミミズによる腐食土の形成について』1881年

# 出口治明さんが選ぶ「あわせて読みたい」BOOK GUIDE



## 『新訳ビーグル号航海記 上・下』

チャールズ・R・ダーウィン／荒俣宏=訳(平凡社)

1831年12月にプリマスを出港したビーグル号は、バイア、リオ・デ・ジャネイロ、ブエノス・アイレス、フエゴ島、フォークランド諸島を巡り、太平洋側の南米大陸にあるサンティアゴ、リマ、ガラパゴス諸島へと向かう。さらにタヒチ、ニュージーランド、オーストラリア、モーリシャス島を経て、1836年10月にイングランド南西にあるファルマスで、ダーウィンはビーグル号から下船した。

5年近い航海でダーウィンは発見、体験したことをまとめたのが本書。どこの土地でも動植物をていねいに観察し、土地ごとの動物の分布の違いや種ごとの習性、動物と植物の関係、寿命の長さに影響を与える要因などについて考察を重ねている。生物学のみならずサンゴ礁や地震など地質学にもとづく知見も広く、奴隷制のあり方、原住民たちの暮らしぶりなど、考察は比較文化論にも及ぶ。

なおダーウィンがイングランドを出たのは、この航海が最初で最後である。



## 『進化とは何か ドーキンス博士の特別講義』

リチャード・ドーキンス／吉成真由美編=訳(ハヤカワ文庫NF／早川書房)

進化生物学者のドーキンス博士が英国王立研究所で行った講義をまとめたもの。ハリネズミもヘビも最初からデザインされたのではなく、あたかもデザインされたかのように見える「デザイノイド」物体であり、そこに行きつくまでには特別なプロセスが存在する。それがダーウィンのいう「自然選択」だと説明。「デザイノイド」物体にはありえない欠点も残されているのは、進化が非常にゆっくりとしたものだから。そして生物が世界に適応していくのは、祖先が学習するからではなく、偶然、幸運な変異が起きるからだと言明。ダーウィンの進化論を多くの事例をもとにわかりやすく解説し、これからの人類の進化についても自身の見解を述べている。



## 『宇宙からいかにヒトは生まれたか 偶然と必然の138億年史』

更科功(新潮選書)

宇宙が誕生し地球が形成され、生命が誕生したのはだいたい40億年くらい前のこと。地球上のすべての生物はタンパク質とDNAをもち、共通祖先から進化してきた。細菌は、核をもつ真核生物に、多細胞生物へと進化し、さらに膨大な時が流れ、哺乳類が誕生する。この過程で地球は何度かスノーボールアース（全球凍結）となった。生物には過酷な状況だが、高温環境になった途端に生物は多様化した。生き残った生物にとって競争相手がいない状況だったからだ。ダーウィンが解明できなかったカンブリア爆発（生物の種が一気に増加した）、さらに恐竜の盛衰、人類の進化までを地球の歴史と重ねながらわかりやすく解説する。



## 『外来種は本当に悪者か 新しい野生 THE NEW WILD』

フレッド・ピアス／藤井留美訳(草思社)

外来種には、人間がもちこんだものもあれば、古くからの方法で入り込んだものもあるが、必ずしも生態系に脅威を与えるわけではない。それにもかかわらず、外来種を悪者扱いする論者も多い。著者は古今東西の例をもとに、外来種が地域の生態系にどのような影響を与えたのかを紹介。アマゾン川流域に広がる熱帯雨林は何百万年も前からまったく変わっていないのではなく、かつて繁栄していたと思われる都市遺構がいくつも見つかっている。“手つかずの自然”は果たしてどこで見つかるというのか。ダーウィンが唱えた自然選択説は、生態系に自然のバランスを保つことを求めるものではない。外来種であっても環境に最も適したものが生存すると著者は指摘している。



## 『「おしどり夫婦」ではない鳥たち』

濱尾章二(岩波書店)

鳥の繁殖に関わる生態を、国内外の最新の論文で提示された数多くの事例をもとに考察。一夫一妻、一夫多妻、多夫一妻などパートナーとの関係は多様で、さらに、つがい外交尾もあれば、離婚、再婚もある。ほかの種の巣に卵を産み育ててもらう托卵というやり方をするカッコウのような鳥もいるが、托卵される鳥たちもその状況を全面的に受け入れている。

るわけではない。自分が産んだ卵かどうかを見分けることもできるのだ。鳥たちの進化は少しでも多く子孫を残す性質に対して優位に働いていることがよくわかる。

編集部より

動画のご視聴をありがとうございます。

今後のイベント情報など、以下のページにて発信しております。どうぞよろしくお願いいたします。

<https://honsuki.jp/deguchi>

また、ご意見・ご感想など、以下のアドレスまでお送りいただけますと大変嬉しいです。今後の参考とさせていただきます。

[salon@gr.kobunsha.com](mailto:salon@gr.kobunsha.com)

光文社新書編集部  
Web「本がすき。」編集部